

在トロントの旧知の方から、年賀代りにカナダ日系紙の一つである『ニューカナデアン』紙の十二月三十日号（一九八〇年特別号）を送っていただいたので、久しぶりに目を通し、いろいろの感慨が湧いた。

私は、けっして日系紙の忠実な読者ではなく、たまたま手に入れば読むというほどの気紛れな読者にすぎない。したがって『ニューカナデアン』紙の性格や編集方針が、たとえばライバル紙の『大陸時報』などと比べてどう違うか、といったような点について、私には語る資格がない。ここでは、たまたま手許に届いた『ニューカナデアン』の号に即してのみ、雑然とした感想をしるすにとどめた。

英語を読むのに難渋する一世と、同じく日本語を読むのに難渋する二世とを主たる読者にする場合が多いので、どこの日系紙でも、紙面が日本語と英語の二本立てになるものらしい。それも、同じ内容の日本語版と英語版をただ並べるというのではなく、日本語の紙面と英語の紙面とは、内容も編集方針も大幅に違う場合が多い。『ニューカナデアン』紙も、日本語版と英語版では、別の新聞という感じが強い。

海外の邦字紙は、一般に活字もレイアウトも文体も古臭く、在外日本人の間では、あまり評価されないのが普通である。筆者の留学時代をふり返ってみても、日本からの留学生や研究者の間で、現地の邦字紙は、あまり問題にされていなかった。

たよりに覚えていた。情報源としても、情報量は一般紙に比べてはるかに少ないので、特別に日系社会に関心のある人は別として、その存在すら知られていなかったのではないかと思う。いまでも、事情はそう変わらないのでなからうか。

私自身、前述したように、日系紙の愛読者ではなかった。ところが、こんど送ってもらった日系紙の特別号を丹念に読んでみて、私は少し自分の考えを改めなければならぬと思った。編集は、たしかに野暮で、お世辞にもあかぬけしているとはいえないが、内容的にけっして水準は低くないのである。日本の巷に氾

日系新聞を読む

平野敬一

濫している低俗スポーツ紙や大衆迎合の週刊誌に比べると、はるかにまじめで、レベルも高いことを改めて認識させられた。

内容をみよう。いま手許にある号は、日本語版と英語版とが、それぞれ広告を含めて二十四ページ、計四十八ページもあり、特別号のせいか、なかなかの分量である。日本語版は年老いた一世たちの回顧的記事が多く、問題意識の稀薄さは否めないが、日本事情の紹介や日本映画（この号では「生きる」）の解説など、きわめてまともなもので、日系の老人のために調子を落とすといったコンディセ

ンション（恩に着せるような態度）がないのが気持よい。もっとも、なかにはなんで掲載したのか首をかしげたくなるような独りよがりの文章（日本の留学生の執筆か？）がないわけでもないが。

日本語版に比べると、英語版は、ほとんど問題意識が強く、姿勢も意欲的である。内容は、けっして軽くない。以前、在東京「外人記者」の一人だったメル・ツジ氏の講演要旨が冒頭を飾っているが、これは一読に値する。日系四世になる氏が、なおも遭遇し、見聞するカナダ社会の種類の偏見を鋭く突いたもので、一世や二世の古い世代の日系人が避けて、触れた

がらぬ問題を、ずばり指摘している。テレビや新聞などマスコミ自体が有する偏見の体質や、マスコミに登場して害毒をまき散らす人種的偏見の持ち主が実名でやり玉に挙げられている。これと関連して興味深いのは、やはり同じ英語版に掲載されているトモコ・マカベ氏（サスカチュワン大学）の四ページに及ぶ論文「日系カナダ人の強制移住と二世のアイデンティティ」である。この論文で、氏は日系二世が総じて戦時中に受けた強制移住という理不尽の措置（これこそ人種的偏見の極め付きの例）を問題にすること

意識の外へ放逐したがっている煮え切らない態度を指摘しているのである。してみると、日系の強制移住を人権上許し難い措置として徹底的に資料調査をしたケン・アタチ氏の日系史や、前述のメル・ツジ氏の発言などは、現在の境遇にあまり不満をもたない多くの二世たちにとっては、不協和音として響くのだろうか。いまさら過去をほじくり出してほしくない、という気持は分からぬではないが、新しい移民（たとえばベトナム難民）がカナダの社会で遭遇するに違いない偏見に對しても、目をつむったり口をつぐんだりすることになるのではないか。社会の人種的偏見との戦いで、新しい後続の移民たちが、先輩格にあたる日系社会を頼り甲斐ある盟友とみなしているかどうか、その点が、私にも気がかりである。

英語版で他に印象に残ったのは、トロントの市議員に選ばれたゴードン・チヨング氏（中国系カナダ人）の講演要旨だった。氏は歌や踊りで人種（エスニック）の特異性を強調する一部の傾向を時代遅れとみなし、それより政治の世界に進出し、カナダ社会のメイン・ストリーム（本流）に入ることの方が肝要、と説いているのだが、若い読者に共鳴するものが多いのではなからうか。

紹介はこれで尽きるわけではないが、英語版には日系社会が抱えているさまざまな問題についての照射があり、読んでいて、うるところが多かった。私にとつては、年頭のいい収穫になった。

（東京大学教授）